

保育者養成課程の教育内容について（その4）

○林 陽子
(岡崎女子短期大学)

新井美保子
(愛知教育大学)

1. はじめにー目的と方法

幼稚園教諭及び保育士養成のカリキュラムが相次いで改正され、実習関連の教科目の重要性が相対的に増したが、短期大学においては2004年3月卒業生が新カリキュラムを修了する第一期生となる。

筆者らはこれまで、保育者養成課程の教育内容について養成年限を視野に入れた検討を重ねてきたが、その過程で各実習と実習以外の教科目との関連性に注目し相互により有効な学習効果が得られる方策を模索してきた。本研究では、専門教育科目のうち実習以外の教科において学習した内容が各実習とどの程度関連しているのか、学生の理解という視点を通して明らかにするために、短大における新カリキュラム修了生に対してアンケート調査を実施し、今後の保育者養成教育について考察を試みた。

2 調査の時期及び実習体験の概要

2003年12月中旬調査実施。対象は調査日時に回答可能であった○短期大学2年生248名。(全体では269名)質問紙は、配布したその場で回答してもらい回収した。回収率は100%。回答した学生は、調査時点で、保育所実習(5月末～6月中旬に20日間)、幼稚園教育実習(9月中旬～10月に3週間：ただし1年次にはば7日の見学・参加実習を体験)、施設実習(1年次2月～3月又は2年次8～9月に実施：1年次に見学を体験)を修了している。

3 結果

(1) 実習したことで理解が深まった学習内容

資料1に記載した31項目の学習内容が、実習したことでどの程度理解が深まったか尋ねた。「大いにそう(理解が深まったと思う)」を2点、「多少はそう(同上)思う」を1点、これら2段階以外の回答、すなわち「あまり思わない」「全く思わない」「学んでいない」を0点としてそれぞれに回答した人数を乗じた結果、31項目の平均点は、保育所実習については342.16点、幼稚園実習では344.79点、施設実習では215.83点であった。(満点は496点)また、総点の上位10項目は表1、下位5項目は表2に示す結果となった。

31項目中「一人一人に応じた援助の大切さ」の理解は各実習とも第1位で、学内で学習したことが

資料1 学習内容の項目一覧

1. 保育所・幼稚園・福祉施設の役割 2. 保育・教育・児童福祉・養護の目的 3. 保育者の役割
4. 年齢ごとの発達の特徴 5. 発達の個人差
6. 一人一人に応じた援助の大切さ 7. 子どもの内面理解の必要性
8. 障害児に対する援助方法
9. 子どもの心身の健康の様子 10. 子どもの食生活の様子
11. 子どもの仲間関係 12. 子どもの興味・関心
13. 子どもの自然物へのかかわり 4. 子どもの言葉の様子 15. 子どもの表現の様子
16. 乳児の遊びと基本的生活 17. 乳児への援助の方法
18. 幼児の遊び 19. 幼児の遊びに対する援助方法
20. 疾病・応急処置・安全対策
21. 教材選択の方法 22. 環境構成の重要性や設定方法
23. 指導計画の作成・展開方法
24. 歌・手遊び・弾き歌いの方法 25. 運動競技・身体表現等の援助方法 26. 紙芝居・絵本等の読み方・演じ方 27. 描画・粘土・製作等の援助方法
28. 壁面構成の方法
29. 子どもが降園後の保育者の仕事 30. 保育者にふさわしい言葉遣い・身だしなみ
31. 子どもと家族の問題

実際の乳幼児への援助を通してより良く理解できたとしている。「子どもの内面理解」や「保育者の役割」「保育者にふさわしい言葉遣い・身だしなみ」についても順位の違いはあるが、いずれの実習体験も大きく影響していると自覚されている。しかし、「発達の個人差」や「子どもの興味・関心」など、実習によって差のあるものも多い。施設実習は「保育所・幼稚園・福祉施設の役割」及び「子どもの家族の問題」の理解と関連が強いが、「歌・手遊び・弾き歌いの方法」「指導計画の作成・展開方法」は幼稚園実習との関連が強い。また幼稚園実習、保育所実習ともに「障害児に対する援助方法」や「壁面構成の方法」との関連は強くなく、保育所実習と「教材選択の方法」「乳児への援助の方法」(27位)や「乳児の遊びと基本的生活」(26位)の理解とも関連は低い。

これらのことから、保育所実習と幼稚園実習ではある程度共通する傾向もあるが、施設実習に関して

表1 各実習と関連が深いと意識された項目 上位10項目比較

順位	保育所実習	幼稚園実習	施設実習
1	一人一人に応じた援助の大切さ	一人一人に応じた援助の大切さ	一人一人に応じた援助の大切さ
2	保育者の役割	紙芝居・絵本等の読み方・演じ方	子どもの内面理解の必要性
3	子どもの内面理解の必要性	子どもの内面理解の必要性	保育所・幼稚園・福祉施設の役割
4	紙芝居・絵本等の読み方・演じ方	幼児の遊び	保育者の役割
5	幼児の遊び	保育者の役割	保育・教育・児童福祉・養護の目的
6	保育者にふさわしい言葉遣い・身だしなみ	保育者にふさわしい言葉遣い・身だしなみ	子どもと家族の問題
7	発達の個人差	子どもの興味・関心	保育者にふさわしい言葉遣い・身だしなみ
8	子どもの興味・関心	子どもの仲間関係	発達の個人差
9	幼児の遊びに対する援助方法	歌・手遊び・弾き歌いの方法	子どもの心身の健康の様子
10	子どもの仲間関係	指導計画の作成・展開方法	子どもの仲間関係

表2 各実習と関連が深くないと意識された項目 下位5項目比較 (3種実習比較のみ)

順位	保育所実習	幼稚園実習	施設実習
1	障害児に対する援助方法	障害児に対する援助方法	描画・粘土・製作等の援助方法
2	壁面構成の方法	疾病・応急処置・安全対策	壁面構成の方法
3	疾病・応急処置・安全対策	壁面構成の方法	歌・手遊び・弾き歌いの方法
4	教材選択の方法	保育・教育・児童福祉・養護の目的	運動競技・身体表現等の援助方法
5	保育・教育・児童福祉・養護の目的	子どもと家族の問題	紙芝居・絵本等の読み方・演じ方

は、独自の結果を示しており、今回の調査項目にバランスを欠く点があったことも考えられる。いずれにしても、多くの学生は、実習を体験することで学内での学習内容の理解が深まったと意識している。

(2) 実習形態・内容の特徴と考察

調査対象の学生の実習体験は以下のようなものである。

保育所実習時に低年齢児の実習をしていない学生が31.5%ある。また、低年齢児の実習を体験していても、その日数は「1～2日」が33.5%、「4～5日」が12.5%であり、これらのことが乳児の生活や援助についての理解の深まりが下位にあることと関連していると思われる。また、保育所において「いろいろな年齢のクラス」で実習した学生は67.8%で「年齢ごとの発達の特徴の理解」を一定程度深めていると思われる。(12位)

実習の方法に関しては、保育所実習においては、「部分実習のみ」が28.7%、「絵本読み等の短時間の実習のみ」が6.5%である。幼稚園実習においては「一日実習を行わなかった」が34.7%、「研究保育を行わなかった」が14.9%ある。このことが、教材選択の方法(24位)「子どもの心身の健康の様子」(23位)の順位と関連しているのではないだろうか。

なお、施設実習の実習先は児童養護施設が83.5%、知的障害児施設は通所施設も含めて8.8%であった。保育所や幼稚園のみならず施設実習においても障害

児に対する援助方法の理解が深まったとする学生の多くない原因でもあろう。

4 考察と今後の課題

今回のアンケート調査によって、実習は短大で学んだことをより深く理解するために寄与しているが、実習の内容や方法によって関連する内容や理解の深まり方に差異が大きいことが明らかになった。そこで、今後の課題として以下のように考察してみる。

まず、94.4%の学生が「保育者をめざしている・内定している」と回答しているにもかかわらず、その実習体験は乳児の保育や障害児の保育の理解を十分深めるには至っていない。一定期間乳児や障害児と関わることを保障する実習が用意されることが望まれる。第二に、保育の内容や方法そのものへの理解が深まるような実習のあり方と前後の学習指導の充実である。児童理解や発達理解と活動や教材、環境との相関が理解できることが望ましい。第三に、実習を通して家族や家庭の問題が具体的に理解できるようになることが望ましい。さらに、保育所、幼稚園、児童福祉施設の役割や目的が理解できるような実習のあり方と前後の学習指導が必要である。これらの課題は、どの時期に何を目的とする実習を設定しそれを支える科目配当と実習前後の指導として何を提供するのかという、言わば「実習を軸とする養成課程」の可能性という課題と重なるのである。